

良時代の壺0.5%、不明0.4%、埴輪・横瓶0.2%、長頸壺・短頸壺・壺類の蓋・壺・小型器種の口縁と考えられるもの0.1%である。他は平安時代のものである。

重量も同様の傾向を示すが、大型の器種は重量が大きいため高い比率を占めている。図示した以外のものの比率を高い順に示すと、壺1.2%、提瓶1.0%、埴輪0.7%、壺類・横瓶0.6%、蓋身が不明な壺・高壺0.4%・壺類蓋・壺と考えられるもの・奈良時代の壺が0.1%である。それ以外は0.1%を下回るものである。

グリッド出土の総点数は10,670点、総重量は10,450,819gである。器種の点数の比率は古墳時代の甕が最も多く全体の9割を占め、次いで不明分、提瓶、平安時代甕、壺蓋、の順である。図示した以外のものの比率を高い順に示すと、古墳時代身蓋不明の壺が

0.7%、壺身が0.35%、高壺が0.38%、平安時代壺が0.29%、壺が0.23%、平安時代高台付壺が0.19%、古墳時代壺類が0.17%、平安時代無台壺が0.13%、奈良時代の壺が0.12%、平安時代蓋が0.11%、古墳時代瓶類が0.1%で、他は0.1%を下回る。図示した遺物がある程度の傾向を反映していると思われる。

重量は古墳時代甕が圧倒的である。平安時代甕が0.132%の他は0.1%を下回る。

全体的には、古墳時代では、甕が大きな比率を占め、次いで壺蓋・壺身・提瓶が多い。平安時代は、壺・皿類が多く、甕は全体的に少ない。また、蓋は壺に対してごく少ない。

以上の様相が、末野遺跡F区の第1～3号窯跡、西側灰原における須恵器生産の傾向である。

2. 古墳時代の須恵器の様相

(1) 各器種の様相

本書で報告した末野遺跡の内、一定のまとまりをもって単位となる資料は、第3号窯跡、灰原2、灰原3、3層、平安時代灰原の出土資料である。ここでは、古墳時代の資料、第3号窯跡、灰原2、灰原3、3層の資料を中心に検討することにしたい。

検討の前提となる資料群の前後関係は、古い方から順に、灰原3→第3号窯跡→灰原2である。3層は灰原3の上に広がっている。以上の前後関係を念頭に各器種ごとに検討を進める。

壺蓋 第3号窯、各灰原の法量については第191・192図に示した。口径は灰原2が破片資料が多く不明瞭だが、第3号窯、灰原3に比して全体的に口径がやや小さくなるようである。また灰原2の壺蓋には更に大小があるようである。3層・グリッド出土のものにも大小がある。器高はややばらつきがあるが、総じて浅めである。

成形は厚い粘土盤に粘土紐を積み上げて行われている。グリッド10は何らかの理由で天井部が平たい状態のままで仕上げられている。灰原3出土資料には、成形の際に付いたと考えられるナデや押さえの痕跡が見

られる。

口クロの回転方向は右回転のものがほとんどで、灰原3に左回転のものが若干見られる。

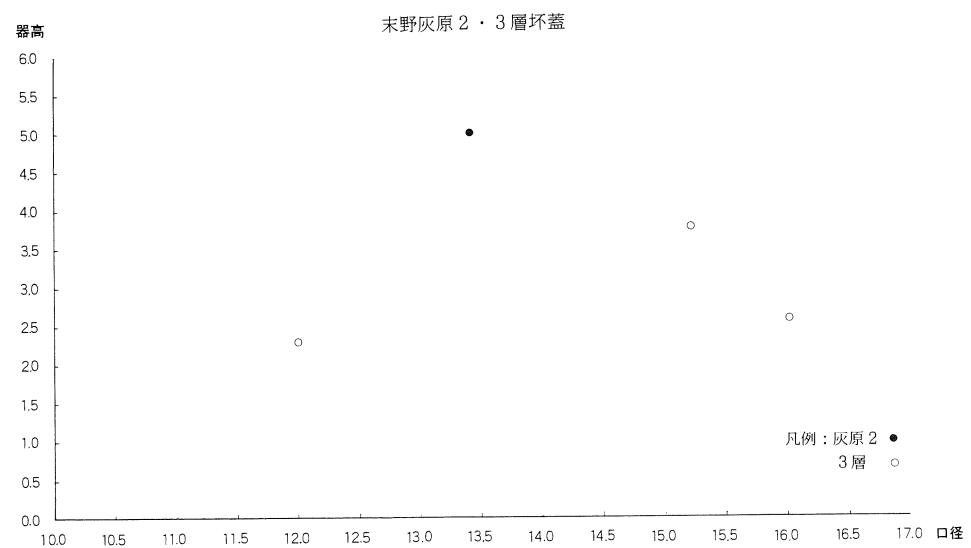
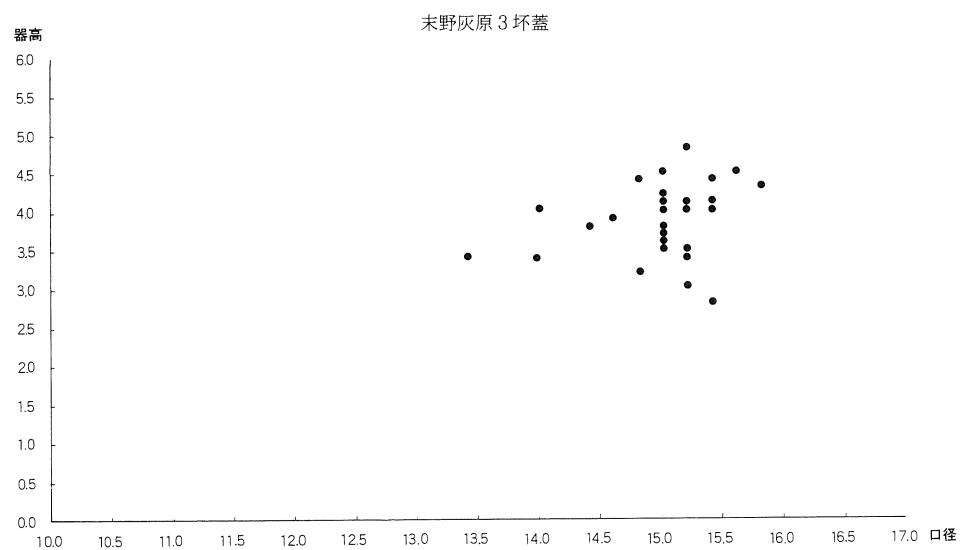
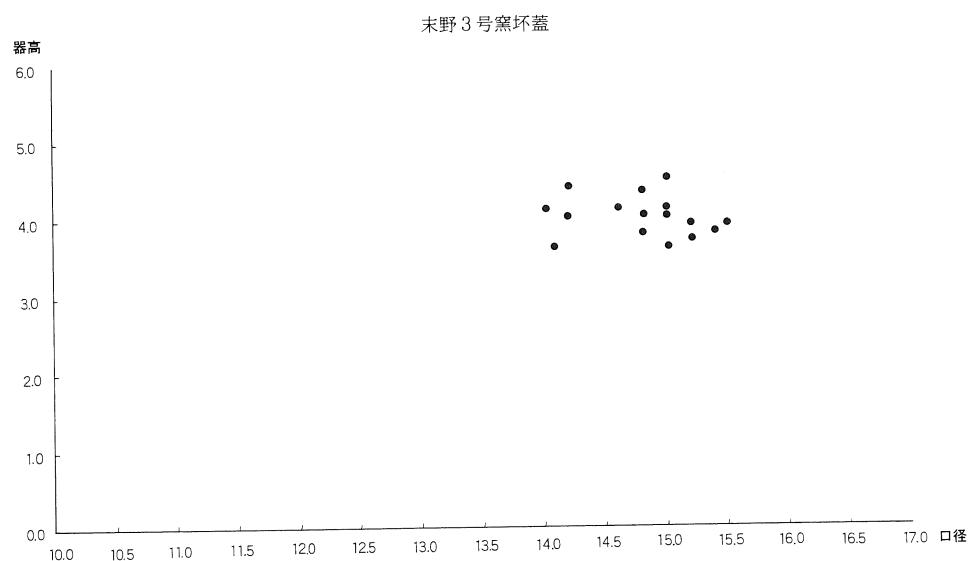
基本的な形態は、天井部から口縁部への変換点付近が肥厚し、口縁部が直線的に開くものである。器肉はほとんどが厚いものだが、灰原2・3層出土のものには薄いものがある。

口縁部の形態は大きく2つに分けられる。第1類は、口縁端部が直立もしくはやや内傾するもので、今回の調査で出土したほとんどのものが本類に属する。グリッド17は口縁部と体部の境に浅い沈線が巡らされる。第3号窯・灰原2・3層はこの類のみで構成される。第2類は変換点付近に段もしくは沈線が巡らされ、口縁部が大きく開くものである。第3号窯1、グリッド11～13、35・36が該当する。

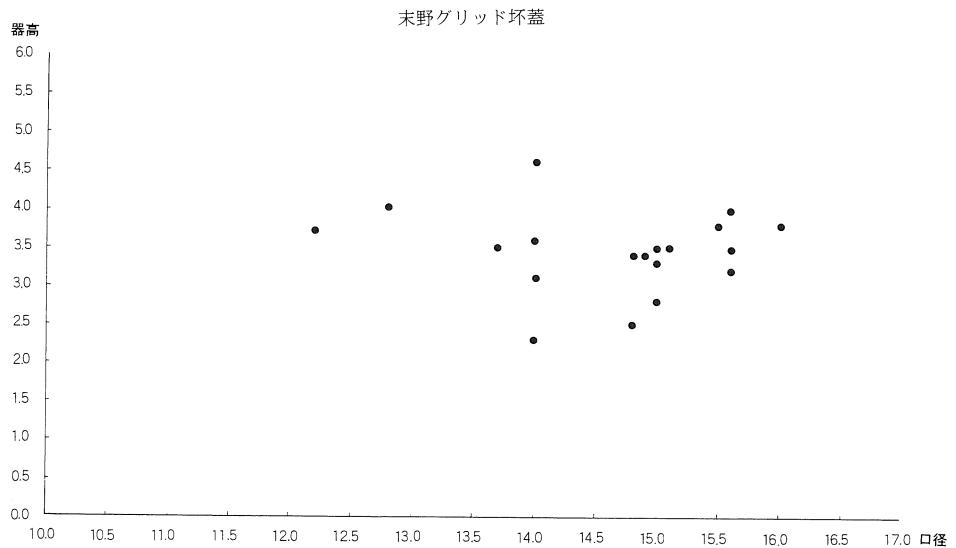
天井部は回転ヘラケズリが施されるものがほとんどで、手持ちヘラケズリが施されるものが少数見られる。

第1類の第3号窯・灰原3・グリッド出土のものには端部をタタキ工具あるいはヘラによって押されたと考えられる痕跡がある。これは陶邑外周の6世紀後半の窯跡を中心に見られるものであることが、江浦洋氏

第191図 末野遺跡杯蓋法量分布図（1）



第192図 末野遺跡杯蓋法量分布図（2）



によって明らかにされている。(江浦1997) また、福岡県日焼原3号窯でも同様の例が見られる。(伊崎1989) (註1) 末野窯の技術的な系譜関係を示唆するものと考えられる。

江浦氏は「口縁端部を対象として臨機に行われる特徴的な成形技法の一種」(江浦1997P14129)としている。また、施されている率の低さ等から、「必要不可欠なものであった可能性が低い」(同P14126)と指摘し、「装飾的」なものであるという含みを持たせている。実際に日置荘遺跡L-1号窯の資料を観察させて頂いたが、この端部の調整が端部の形態そのものに影響を与えていないことからも氏の見解は首肯されるものである。一方、末野遺跡では出土資料中でも、極めて限定期に見られるものであるものの、不必要なものであったかどうかは疑問である。第1類の特徴として前述したが、末野窯においては端部を直立させることに重きが置かれていると考えられるため、端部の形態を整えるために、この調整は必要なものであったと思われる。第3号窯2は、この調整を施した結果、内屈してしまっており端的に必要性が現れている。その他のものも調整が施された部分が平坦面となっており、必要性が窺われる。実見した訳ではないため詳細は不明だが、日焼原3号窯の資料も同様のものと見受けられる。従って、陶邑外周地域においては口縁部の

形態に直接関係しないが、地方窯では端部の形態に関わる調整になっていると言えるだろう。なぜそこまで端部を直立、内傾に仕上げねばならないのかという点が問題である。工人集団にも関わる問題であるが、ここでは指摘に留めたい。

この他に折り返し状のかえりの付く蓋がグリッドから出土している。

坏身 法量については第193・194図に示した。第3号窯跡・灰原3が相対的に大型でやや深く、灰原2は浅めである。グリッド出土のものは第3号窯に近い分布を示している。

成形は、坏蓋と同様である。口縁部の粘土紐を積み上げた際の痕跡が見られるものがある。

ロクロの回転方向は、基本的に右回転で、灰原3のみに左回転が若干見られる。

形態は、扁平な印象を受けるものがほとんどで、平底風に仕上げられるものが多い。底部は概して厚く、底部から体部の変換点付近が肥厚する。

口縁部は2つの形態がある。第1類は直立した状態に仕上げられるもので、断面が三角形で厚い。端部を更につまむようにナデている。内面の口縁部と体部の境が凹線状に凹むものはあるが、爪は入らない。本書で報告した大部分が本類に属する。第2類は内傾し、均一な厚さにするものである。灰原2-9、第1号窯

跡掘り方3、グリッド33が該当する。グリッド33は大きく反って端部は直立する。内面の口縁部と体部の境に爪が入り、器壁も極端に薄い。最も技術的な高さを感じさせるものである。底部は原則として回転ヘラケズリで、グリッド32が手持ちヘラケズリ、33がヘラ起こし後ナデである。

この他に所謂壊Gがグリッドから少量出土している。

高壊 高壊には有蓋と無蓋がある。有蓋高壊は灰原3、3層から出土している。壊部の作りは基本的に壊と同様だが、灰原3-47は壊身より大きく深い。脚部との接着は同心円のヘラによる刻みを入れて圧着している。脚部自体がどのようなものかは不明である。また高壊専用の蓋は確認できなかった。無蓋高壊には2つの形態がある。第1類は体部から直線的に大きく開き、そのまま口縁部に至るもので、体部と口縁部の境には明瞭な段が付けられている。第3号窯、灰原3、グリッドに認められ、第3号窯のものは扁平である。第2類は口縁部が体部から段をもって直立するものである。3層4が該当する。脚部は第3号窯39、グリッド43の例で、長脚2段の3方透かしである。脚部は長脚2段3方透かしのものがほとんどで、短脚となる可能性があるのは、3層7のみである。またグリッド45は4方透かしとしたが、小片のため可能性にとどまるものである。グリッド46には壊部と接着した際の同心円の刻みが見られる。

ロクロの回転方向は左回転のものが多い。

臆 有段口縁で、端部に凹線が入れられるものである。いずれも絞られずに太い。口縁部は沈線により上中下の3段に分けられ、各々に波状文が施される。グリッド51は縦位の刷毛目が施される。胴部はややつぶれた球形で、上位の沈線区画内に波状文原体等の櫛歯状工具による押捺が施されるもの（灰原3-63~67）がある。グリッド53は上部が括れ沈線が施される。

ロクロの回転方向は確認できたものは右回転である。

提瓶 全形が知れるのはグリッド61のみだが、破片

からも61同様の製作方法が明らかになった。まず、法量については大小があると推定される。グリッド61は小型のものである。灰原3-70・第2号窯5・グリッド54は大型になると推定される。口縁部には、無文の素口縁（灰原2-19・灰原3-68~70）と、複合口縁で波状文が施されるもの（灰原2-18）、複合口縁で無文のもの（灰原2-20・3層9）がある。グリッド出土のものには、単純口縁で波状文、刷毛目が施されるもの（グリッド59・60）が認められる。これらの中には横瓶等の口縁も含まれる可能性がある。胴部は幅3~4cmの粘土を積み上げ、タタキもしくはロクロナデによって成形される。グリッド61には更にヘラケズリが施されている。側端は基本的に蓋の接着により閉じられている。グリッド61は片側が絞り込まれて、径6cm程の円盤が接着されている。その他のもので、絞り目が認められるものはない。蓋外面のカキ目は大きく中心からの螺旋状のものと、中心を空けて施す2種類がある。各々に更に様々なパターンがある。各窯、灰原との対応関係はない。グリッド出土のものには無文と考えられるものがある。把手は環状のもの（灰原2-21・3層12）、鉤状のもの（灰原3-76）があり、しっかりしたものである。

ロクロの回転方向は不明である。

壺類蓋 第3号窯（46・47）、灰原3（83）には大型で厚手の、つまみの付かない扁平な蓋が認められる。直立するかえりが付く。長頸壺・短頸壺等の蓋と推定される。窯跡出土資料中には管見に触れる限り、類例は見られない。

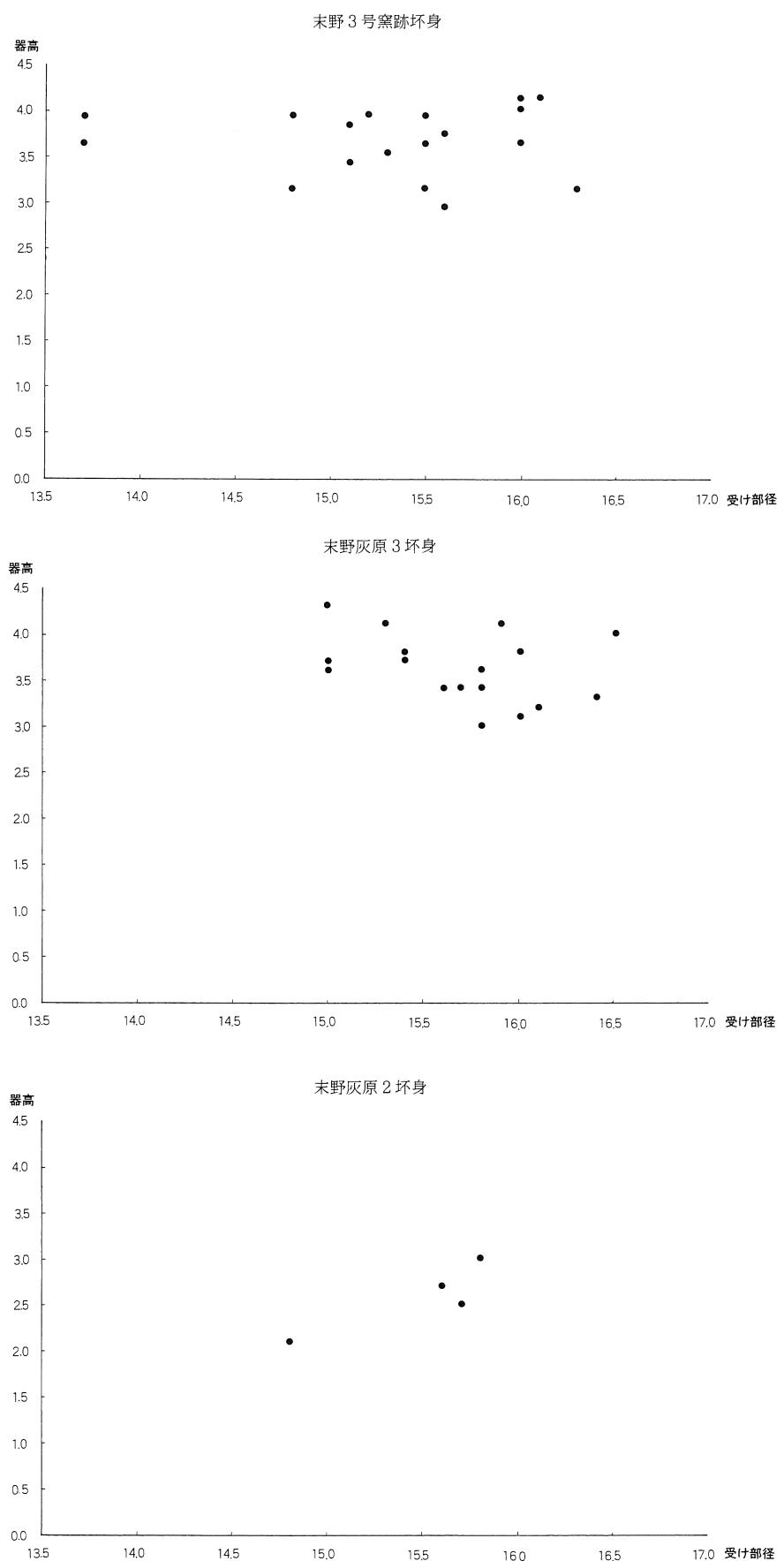
灰原2-17は壺類の蓋と考えられる。ごく薄く扁平なものである。

ロクロの回転方向は右である。

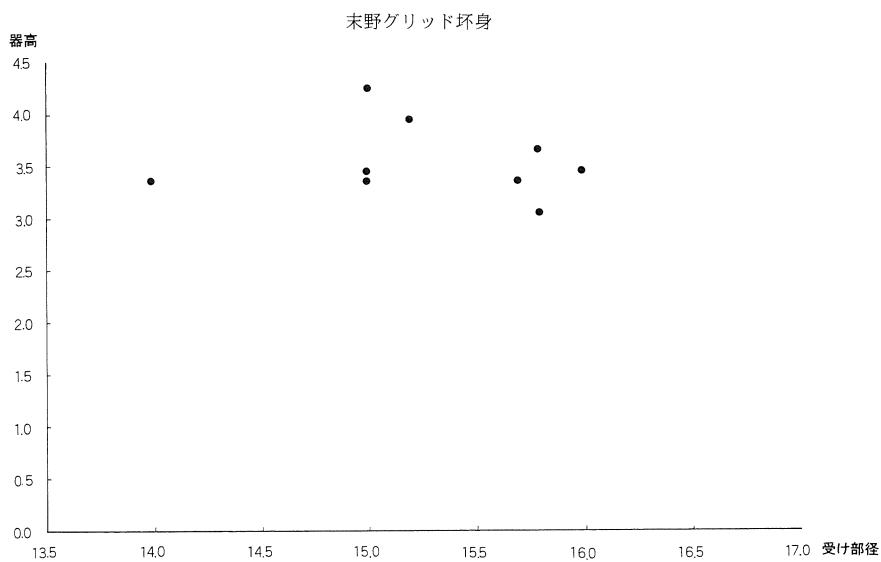
短頸壺 第3号窯から出土している。球形の胴部に直立する口縁が付くもので、沈線による段が付けられる。グリッドからも同様のものが出土している。文様が施されるものや脚が付くと考えられるものがある。ロクロの回転方向は右である。

壺類 灰原2-16は長頸壺の胴部破片と考えられる。

第193図 末野遺跡杯身法量分布図（1）



第194図 末野遺跡杯身法量分布図（2）



本書で報告した資料中確実に長頸壺といえるものはグリッド79のみで、詳細は不明である。グリッド85も長頸壺等と考えられる。

壺類脚部 第3号窯のみから出土している。大きく外反して開き、端部は直立する面を持つ。長頸壺等の脚部と考えられるが、管見に触れる限りでは類例を見出せない。

壺 灰原3-83は大型の壺等と考えられる。管見に触れる限り類例は認められない。

横瓶 第3号窯、灰原3で胴部のみが認められる。口縁部で明確に横瓶と断定できるものはない。破片のため確実ではないが、胴部が太くやや短い両側面が平坦なものと、両側端が丸くやや長いものがあると考えられる。成形はタタキによるものである。第3号窯53、グリッド77・78の蓋の外面にはカキ目が施されている。提瓶に認められるカキ目と同様のものである。

埴輪 第3号窯、灰原2、灰原3で認められる。前述したが、成形はタタキとロクロナデ、ナデ、調整はカキ目で須恵器と同様である。底部は倒立して穿孔されている。埼玉古墳群中の山古墳出土のものと同様である。

甕 甕には、大・中・小があると推定される。灰原2・3では明らかに大～小が認められる。その比率については、破片のみでは判別できない場合が多く、明

らかではない。

＜口縁＞ 粘土紐の積み上げとタタキ、ロクロナデによって成形される。

長短があり、大型のものには長い口縁、中・小型のものには長・短の口縁が付く。口縁の長いものは胴部と別個に製作されて後に胴部と接着され、短いものは胴部から連続的に作られる。粘土の幅は長いものが3～4cm、短いものが2～3cmである。

長い口縁は、灰原3-88等で下位にまでタタキが認められることから、倒立して製作されたと考えられる。

口縁端部の形態は次の5つに分類できる。

A ナデにより仕上げられるもので、端部は中央が凹む面を持つ。

B 端部の下端に粘土を貼付するもので、幅広の端面が作られる。

C 端部の上端に粘土を貼付するもので、長いつまみ上げ状の面が作られる。直立するように仕上げられるものと、角度がなく仕上げられ、下方に粘土が伸びてバリ状になるものがある。

D 端面に粘土が貼付され、広い面が作られるもの。

E 端部の内外面を包むように粘土が貼付されるもの。上端に面が作られるものと丸く仕上げられるものがある。

灰原3ではA・Bが多く、灰原2ではD・Eが多い。

第1表 蓋口縁の区画数

文様	区画数	第3号窯跡	灰原3	灰原2	3層	グリット
波状文	2	2	6			8
	3		6		1	3
	4以上		1	1		1
	5				1	
	無					1
刷毛目	4以上	1		2		3
無文	3					

第1号窯の焼台は口縁Eのみに限られる。

区画は、2本の沈線によるもので、無文のもの以外は原則として施される。灰原3-109・111・112は沈線間に粘土が貼付される。長い口縁は3区画、短い口縁は2区画が最も多い。区画と文様は割付と充填という関係ではなく、端部→頸部の順序で施されるものが多い。ほとんどが波状文であり、区画数と各文様との対応関係は明らかでない。波状文が施文される場合には、原則として最下段には施されない。各窯・灰原の区画数については、第1表に示した。

文様には、波状文、縦刷毛目、縦沈線、斜沈線がある。グリッド出土のものには烈点文、各々が組み合わされた特殊な文様がある。

量的には波状文が最も普遍的に見られ、各文様との組み合わせも認められる。刷毛目・沈線はごく少量で、特に第3号窯・灰原3ではほとんど認められない。

波状文は条数、深さともにまちまちである。振幅やピッチに大小が認められる。ここでは仮に、<波状文A>振幅小-ピッチ小、<波状文B>振幅小-ピッチ大、<波状文C>振幅大-ピッチ小、<波状文D>振幅大-ピッチ大、と仮称しておきたい。各々の波状文は口縁の長さとの関係が認められ、口縁が長いものにはC・Dが多く、短いものにはA・Bが多い。結果として、組成の中に有文の口縁の短いものを含む灰原3にA・Bが多いことになる。灰原2-45では表裏に施されている。

全体的に波状文の施文は、長いものでは3区画2段、短いものでは2区画2段が多い。

カキ目を地文とし、波状文Dが施されるものは第3号窯、灰原2、灰原3に認められる。また、F区東側

灰原でも認められ、長く用いられたモチーフであることが分かる。

縦刷毛目・縦沈線は区画線より先に施されている。縦刷毛目はF区東側灰原でも認められる。縦沈線は第3号窯・灰原3では認められず、灰原2・3層のみから出土している。第1号窯の焼台も縦沈線と推定される。2条が1対となっているものが多い。

斜沈線は、灰原2のみで出土している。グリッド出土のものにも認められる。

口縁の長短と文様の関係は、ある程度対応している。波状文との関係では、灰原3の口縁が短いものには文様が施されるものが組成の一部として明らかに存在するが、灰原2では認められない。縦刷毛目は長いもののみに施される。

端部の形態との関係はある程度認められる。波状文は全ての口縁形態のものに認められるが、口縁Cのものには波状文A・Bが施される。また、カキ目地文に波状文Dが施されるものは口縁A・Bのみである。縦刷毛目は口縁Dに施されるのみである。

胴部の接合は、前述した口縁部の製作方法と関係があり、3つの方法が認められる。

長いものは開口部までタタキが施された頸部に別個製作された口縁部が乗せられる。この後は2通りの方法がある。補強帯を使う方法は外面から強く押し込み、内面に粘土が塗り込まれて行われている。補強帯を使うものはごく少ない。補強帯を使わない場合は内外に粘土を塗り込んで行われている。口縁部と補強帯の関係は不明瞭だが、縦刷毛目のもの、カキ目を地文に波状文Dが施されるものは補強帯が付くようである。また、補強帯は灰原3が断面が四角で太く、灰原2・3

層はややつぶれて細い。波状文の段数と補強帯の間に対応関係は認められない。

短いものは頸部の内側に、連続して粘土紐が接着され口縁部が立ち上げられる。

＜胴部＞胴部は、丸底で、破片がほとんどのため不明瞭だが、肩があまり張らず胴中位のやや上位に最大径があるものと、頸部からほぼ水平に開き肩が張るものがある。ほとんどのものが前者のようである。

成形は、幅3～4cmの粘土帯を積み上げ、タタキによって行っている。剥離した面に見られるタタキ痕から、粘土は1枚のみではなく、何枚かが貼り合わされているようである。底部周辺は外面にナデが加えられるものが多い。全形が知れるものが少なく工程数までは不明だが、いくつかの工程の単位が認められる。

胴部に用いられるタタキ工具については、各々の個所で述べたが、概してタタキ、当て具痕とも浅めである。表面のタタキ目で最も多いのはC類(37.3%)である。これにA～Dの判別が困難な不明分(45.4%)を加えると、全体の8割が木目の見えないタタキ板が用いられていることになる。またA・B類も一定の比率で第3号窯跡、各灰原で見られる。裏面の当て具痕は大部分がA類(21.3%)である。これに判別が困難な不明分(74.0%)を加えるとほとんどのものが木目の見えない当て具を用いていることになる。

タタキ板の平行線の間隔は、1.5～3mmのものが最も多い。当て具の溝の間隔も同様である。溝の掘り込みに関しては、一定程度の指向があった可能性がある。

(2) 各窯跡・灰原の型式論的変化

各窯跡、灰原の資料相互の形式論的変化は、坏蓋、坏身、甕に現われている。その他の器種も恐らく差異があるのであろうが、資料数が充分でないこともあり、時間的な差異として抽出するには至らない。

坏蓋 法量では全体的な変化と、種類の増加がある。全体的な傾向としては、第3号窯跡・灰原3がやや大型で、灰原2がやや小型になる。また第3号窯跡・灰原3のものが概して器肉が厚いのに対して、灰原2・3層のものには薄いものがある。

法量分化とは言えないが、灰原2・3層には大小が認められる。グリッド出土のものも同様である。

口縁部の形態は、相互に比較するには量的に問題があるが、現状では灰原3で1・2類の双方が認められるのに対して、灰原2は1類のみである。

坏身 坏身は灰原2・3層の点数が少なく確実ではないが、灰原2が浅めとなるようである。

口縁部の形態は第3号窯跡・灰原3が1類のみであるのに対して、灰原2は1類が多いが2類も認められる。グリッドも灰原2同様である。第1号窯跡掘り方出土資料にも2類が含まれることから、2類は新しい形態である可能性が高い。

甕 対照表として第2表には、灰原3、灰原2、3層の口縁端部形態、波状文分類等を示した。

灰原3は口縁部形態A・B、波状文A・Bが多い傾向がある。縦刷毛目は少なく、沈線施文のものはない。区画に粘土を貼付するものがある。また、短口縁ものに文様が認められる。

対して灰原2では、口縁端部形態D・E、波状文C・Dが多い。縦刷毛目のものが一定程度認められる。沈線施文のものがあり、短口縁のものには文様が認められない。3層にも縦刷毛目、縦沈線のものが認められる。

坏・甕の形態的差異は漸移的なものであり、大きな時間的な幅を想定するには至らず、各々が近接した時期での前後と考えられる。

第2表 甕灰原2～3対照表

要 素	灰 原 3	灰 原 2
端 部 形 態	A B 多	D E 多
波 状 文	A B 多	C D 多
縦 刷 毛 目	△	○
縦 沈 線	×	○
斜 沈 線	×	○
区 画 粘 土	○	×
短 口 縁	文様あり	文様なし

(3) 出土須恵器の時期

末野遺跡出土須恵器の各窯跡・灰原間の差異については、層位の前後関係をもとに対照できるに過ぎない。

関東地方においては土師器が圧倒的な量を占め、ま

た多くの調査例により良好な一括資料が得られている。従って関東地方においては土器編年の基準は須恵器にあるのではなく、土師器の編年が基礎になるべきであろう。ごく僅かではあるが、須恵器が含まれる場合も増加してきたため、本書で報告した資料で確認された前後関係を、土師器の様相と対照することにより時期的な位置づけが可能になると考えられる。末野遺跡周辺でも集落の発掘例が増えており、位置づけはそれらを踏まえて再度行いたい。

ここでは、既存の編年の内、酒井清治氏、富田和夫氏、磯崎一氏の編年との関係、陶邑の資料との並行関係を確認するに留める。

酒井氏は関東地方でも比較的多くの須恵器が出土している群馬県の資料を中心に、5世紀から7世紀前半の在地産須恵器を編年し、各器種毎に推移をまとめ、特色を抽出している。(酒井1991) 本書で報告した資料は、壺を参考にすれば、第3号窯跡・灰原3が氏の4期末から5期初頭、灰原2が5期初頭と考えられる。

また関東地方一特に群馬県を中心として一における須恵器の特色として、八の字状の口縁、天井に沈線を持つ壺蓋、壺の手持ちヘラケズリ、5期における高壺の2段透かしの残存、甕の頸部補強帯、口唇部の波状文、「の」の字当て具の存在等をあげている。末野遺跡出土資料は、壺蓋を除けば概ね合致する。

富田和夫氏は、児玉町今井川越田遺跡(磯崎1995)の資料を中心に7世紀代の土師器を編年し、坂野和信氏の飛鳥地域の土器編年と対比させている。(坂野・富田1997) I段階(新)の今井川越田遺跡24号住居跡出土の壺身は口径12cmの小型のもので、続くII段階(古)の98号住居跡出土の壺蓋は口径12.8cm、壺身は11cmの一層小型のものである。壺の法量のみの対比で、しかも24号住居跡出土のものは、器受け部の突出が極端に短いものであるため確実とは言い難いが、小型のものを含まない第3号窯跡・灰原3の資料はやや遡るもの、即ちI段階(古)と理解されよう。それより新しく、大小があるが98号住居跡出土例ほど小型ではないと考えられる灰原2の資料はI段階(新)と並行す

るものと推定できる。

磯崎一氏は、工業団地造成に伴い調査された今井川越田遺跡の報告が全て終了したのを総括して、土器編年と集落の推移をまとめている。(磯崎1997) 土器編年はVII期に細分され、富田氏の編年との対比が示されている。須恵器が出土した住居跡の位置づけは富田氏の編年と同様である。ここでは、土師器をもって繰り返し操業時期を推定するしかない第1号窯跡との関係を確認したい。第1号窯跡については、掘り方出土の最も新しい遺物が改造の下限を示すと考えられる。本書第18図に示した8の須恵蓋模倣壺は口径11cmとごく小さい。口縁部は短く直立し、ナデにより仕上げられ、体部との境は不明瞭である。磯崎氏の編年VII期の今井川越田遺跡第34・44号住居跡に相似する資料が見られる。従って第1号窯跡の改造前の操業は、第2号窯跡の操業より後、今井川越田遺跡VII期より前と推定される。

田辺昭三氏による陶邑編年は、窯跡編年として具体的な資料が示され、全国的にも信頼が置かれてきた。(田辺1966) 本書で報告した資料が、そのどの段階に当たるのか、筆者の所見を述べておきたい。

陶邑資料中で末野遺跡と対比が可能なのは壺のみである。本書で報告した資料の前後関係については、繰り返し述べた。その起点となる灰原3・第3号窯跡の資料の内、壺については口径が14~16cmと大きく、偏平なもののみである。口縁部と天井部の境には原則として沈線や稜線は施されない。天井部の調整は原則として回転ヘラ削りである。壺身も受け部径15~16.5cmの大型で偏平なもので、口縁部が短く底部が平底に近い状態に仕上げられるものが多い。底部は原則として回転ヘラケズリである。

この様相と合致する陶邑の資料はTK43・TK209である。法量については、両者ともバラツキが大きく、ピークも重なり合っており、それのみをもって分離できない。仔細に両資料を見ると、壺蓋についてはほとんど差異が見出せない。壺身はTK43が底部が広く丸みを帯びたプロポーションで、口縁部がやや長くしっ

かりしている。対して、TK209は底部から直線的に開き、口縁部はごく短い。

この両者の差異は、中村浩氏のII-4・5段階の内容と一致している。(中村1980) また、新たに調査されたTK43(野上1980)も同様の様相を示している。中村II-5段階では、壺蓋の偏平化が特徴の一つとされている。

末野遺跡に立ち返ると、灰原3・第3号窯跡の資料はTK43・TK209の両者に相似する資料を含んでいることが分かる。これを生産が複数次に及んだ結果とできるかどうか遺跡の状況からは判断できない。第3号窯跡の資料がよりまとまりがあるとするならば、偏平化と器形の直線化を積極的に評価することができると思われる。第3号窯跡の資料はTK209に並行すると言えるだろう。灰原3の資料は、新しい様相を評価すればTK209に、古い様相を評価すればTK43とできる。

また、末野の資料は法量に一定のまとまりが認められるが、口径等の数値を用いて対応関係を確定できないのは、畠中英二氏が示した通りである。(畠中1995) 畠中氏は法量と調整によって、陶邑の壺を4群に分類している。第3号窯跡・灰原3の資料は、TK43・209に相当する第3群に近い。

灰原2の資料は小型のものと大型のものが混在するものである。壺身は第3号窯跡のものに口径が近い大型のもので、扁平化が極端である。所謂壺G等の新しい器種は認められない。

この様相に近い陶邑の資料は、TK209である。第3号窯跡は前述のようにTK209でもTK43に連続する段階と考えた。灰原2は資料の様相も第3号窯跡とは異なる様相を示し、TK217のような徹底した小型化が見られないTK209にいくつかの段階を想定することができるのなら、その新しい段階とできよう。TK209がいくつかに細分されるという同様の見解は既に多く提出されているが、それについては別に譲りたい。

次に絶対年代について見ておきたい。現在6世紀後

半から7世紀前半の須恵器の絶対年代は、陶邑編年、飛鳥・藤原編年が基準になっている。従って、陶邑編年、飛鳥・藤原の年代が変われば、当然ながら前後することになり、多分に流動的な側面がある。その飛鳥・藤原編年の年代については、いくつかの立場があり、現在大きく揺れている。(註2)

その中、酒井氏はこの年代観の揺れについて簡潔にまとめている。7世紀については次のように述べている。「最近まで豊浦寺の創建年代がいつかで論議され、603年創建説をとった飛鳥編年が優位で、飛鳥Iは7世紀第1四半期として使われてきた。しかし、最近の豊浦寺の発掘により金堂→講堂の変遷がわかり、最初に建てられたとする金堂からは飛鳥寺に連なる百濟系軒丸瓦が葺かれ、いわゆる高句麗系瓦は後出することがわかつてきた。この高句麗系軒丸瓦を出土する隼上りI段階も下がる可能性が出てきた。

すなわち飛鳥・藤原宮編年は少し白石編年(TK209を7世紀第1四半期とする:福田註)に近づいたことになる。近年、山田寺下層や甘樅丘東麓など飛鳥地域において、良好な須恵器が出土しており、飛鳥Iの年代が全体に下げられてきた。これにより、飛鳥II・IIIがどのようになるか、今後の課題であるが、飛鳥IIIが特に圧縮される傾向がある。」(酒井1997P41左125~40)

1991年に酒井氏は、前述した関東の4期と5期の境は「およそ600年それよりもやや新しい」(酒井1990P20912・3)とした。また、観音塚考古資料館で開かれた特別展の図録中で、末野遺跡第3号窯跡の時期を7世紀初頭としていることから、4期と5期の境をほぼ600年前後に置いていることが分かる。(酒井1997)

筆者は年代観の揺れについて、私見を述べる用意はないため、ここでは酒井氏の年代観に従いたい。先の検討で明らかのように、7世紀初頭の第3号窯跡はTK209の古い段階に当たることから、次の段階とした灰原2の年代、即ち第2号窯跡の操業年代はそれよりやや下るものと考えておきたい。

残る第1号窯跡の操業時期については、掘り方の土

器が手がかりとなる。磯崎氏は、自身の編年を先の富田編年と対比させ、年代を与えている。それによれば、Ⅷ期はおよそ650年を中心とする時期となるようである。従って、第1号窯跡の改造前の操業は、第2号窯跡の操業より後、650年前後までの7世紀第2四半期に置くことができる。改造後の創業期間は、7世紀中葉以後とできるのみである。焼台とされた甕口縁部が時期を示すと考えられるが、現段階では位置づけられない。

（4）埴輪について

既に繰り返し述べているように、第3号窯跡で生産された埴輪は、埼玉古墳群の「中の山古墳」に供給されている。（若松1989）また中の山古墳から出土した須恵器の内、壺類の脚部は第3号窯跡の製品である可能性が高い。

中の山古墳からは、第3号窯跡のカキ目を施す埴輪（A類）（註3）以外にも、ナデ調整のみのB類、縦刷毛目でタガを表現した「須恵質朝顔形円筒」がある。第3号窯跡での生産が明らかになったため、他のタイプのものも末野で生産されている可能性を考えたが、断定に至るものは見つからなかった。B類の胎土は、本書で報告した末野のものとよく似ており、化学分析の結果も末野のものに近いことから、将来的に生産窯が明らかになる可能性がある。「須恵質朝顔形円筒」については、胎土、焼成とも明らかに異なり、別の窯の製品と考えられる。また、埴輪の生産窯と一致する

かは不明だが、出土須恵器にも複数の窯の製品が含まれるようである。この内甕の破片には、太田市菅ノ沢窯跡（群馬県1986）等でも見られる口縁部Cのものがあり、群馬県との関係が窺われる。

中の山古墳の調査担当者である若松良一氏は「須恵質埴輪壺」という呼称を用いているが、本書では一貫して埴輪という呼称を使用してきた。これは、第3号窯跡の製品に限って言えば、底部の穿孔を除いては、あくまで須恵器の製作手法で作られている須恵器の一種であること、東海地方で見られる須恵質の円筒埴輪とは異なることによるものである。

この埴輪の系譜を、若松氏は百濟系といわれる所謂平底短頸壺に求めている。

酒井清治氏は、若松氏があげた徳利形の壺が群馬から埼玉にかけて、氏の編年の2～4期に出土している。（酒井1991）4期の例としてあげられた群馬町地蔵山古墳群五目牛8号墳のものは、それ以前のものに比べて胴が太く詰まり、口縁部が短い。第3号窯跡で生産されたものとは、形態に大きな隔たりがある。

また、大分県日田市朝日天満2号墳からも、波状文が施された同様の平底壺が出土し、中の山古墳と同様に墳丘に立て並べられた可能性があるという。（註4）

このように俄かには、踏み込んだ系譜関係等は求め難い。ここでは、末野窯跡と中の山古墳の関係を確認するに留めたい。

3. 遺構の様相

末野遺跡F区西側では、3基の須恵器窯跡が調査された。各窯跡の様相については、IVで詳述した。本節では、各窯跡の形態および特徴について検討する。

（1）規模と平面プラン

埼玉県内では先にあげた滑川町羽尾窯（高橋1980）の他に、6世紀後半から7世紀前半の窯跡が、東松山市舞台（井上1978）、東松山市根平（水村1980）、坂戸市西谷ツ（坂戸市1992）で調査されている。西谷ツ窯については平面図等が公表されていない。ここでは本

書で報告した3基の窯跡の位置づけを行うため、羽尾窯、根平窯、舞台窯との比較を行いたい。

規模の比較は掘削の変換点が明瞭な床面の規模を用いて行うこととし、全長、焚口、燃焼部、焼成部、煙道の規模を第3表に示した。

まず末野の窯の相互について見ておきたい。全長は第1号窯跡が第2・3号窯跡の約2倍である。焚口の幅や傾斜角は第1・2号窯跡が等しい。第2号窯跡を中心として、全長、傾斜角・焚口幅に相似関係がある